

---

# 風の降る海で

あざみの茶太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風の降る海で

### 【Nコード】

N9471S

### 【作者名】

あざみの茶太郎

### 【あらすじ】

「山をおりたら、帰ってこられなくなるよ」  
「だれからともなく、昔から繰り返しかえし聞かされていた言葉だ。  
「帰ってこられなくなる」って、どういうことなんだろう。」

ぼくが夢から覚めたのは、目の奥が日差しにくすぐられて、くしやみが出そうになったときだ。

大きな海が見おろせる山の頂上。

木造りロτζジの屋根の上。

ここは、緑豊かな木々の枝葉が光の目隠しになって、昼寝をするには一番の場所だ。

寝ころんだまま小さく目を開けると、空をふさいでいる若葉のあいだから、真昼のまぶしさが、ちらちらと瞳におちてくる。

そつとまぶたをとじると、また、からだかほの暖かい空気に包まれる。

きのうは一日中、きょうのようなよい日よりで、ぼくは、うつかりこの場所で寝すごしてしまったんだ。

半分だけ目をあけて、半分だけ夢のなかで、きのうの夜のことを思いかえした。

この山とむこうに見える海のあいだには、ちっぽけな町がある。

ふもとの町と海には、いつも、この山から風が吹きおりにいた。

うたた寝から目を覚ましたときには辺りはもう真っ暗になっていて、屋根のはしから身を乗りだすと、遠く眼下に見る町にも、ぽつぽつと明かりが灯っていた。

真下の窓からは電気の明かりがもれていて、室内から大勢の人の、にぎやかな声が聞こえてくる。

ぼくは暗がりの屋根から木をつたって地面におり、ロτζジの壁によりかかって、とじられた窓のむこう側に耳をかたむける。

聞こえてくる談笑の大半はぼくと同じくらいの年の子の話し声で、ぼくは、それをもっとよく聞こうと、さらに壁にへばりついた。

そついえば、きょうは子ども会かなにかの集まりで、たくさんの

人がこのロッジに泊まりに来ていたんだ。

ぼくは一度も山を下りたことがなかったから、たまにこうして町から人がやってくると、すごく、うれしかった。

それがきょうは、こんなにも人が来ているものだから、どうしても我慢できずに、つい窓からロッジのなかを、のぞきこんでしまった。

ロッジのなかには、床に座りこんでおしゃべりをする子、輪っかをつくってトランプ遊びをする子、それからテーブルに着いて楽しそうに話しあいをしている数人のおとなが見えた。みんな楽しそうに笑っている。

ふと、おしゃべりの輪のなかにいたひとりの女の子がこちらの方にふりむいた。

ぼくは、さっと顔を引っこめて、ぺしゃんこになるくらい、壁にくっついた。

胸のどきどきが、背中にあたる木の内側にこだまして、二倍にも三倍にもなって、またぼくの胸にもどってくる。

そうしているうちに、頭上の窓がぱつと開いて、さっきの女の子が顔を出した。

ぼくは、見つからないように、壁にへばりついたまま女の子を見あげる。

空をこめる闇が深くなり、一層に光を増した月を映す瞳の彼女は、日焼けをした茶色い顔に黒い髪がよく似合っていた。

「気持ちのいい風……」

ながい髪が風にゆれると、そう言ってその子は、ひと呼吸、ふた呼吸、深呼吸をして、パタンと窓をしめた。

ぼくはそのままの体勢で、ロッジの明かりが消えるまで、あの子の声を追いかけていた。

朝はやくに、きのうの人たちは山をおりて町に帰ってしまったら

しい。

今まで生きてきたなかで、けさは一番不思議な気持ちで目を覚ました。

どうしてなのかは、わからないけれど、きのうのあの子にもう一度会いたい。山をおりて、町に行つて、あの子をさがしたい。

目を開くと太陽に手が届きそうな屋根の上で、ぼくはまだ悩んでいた。

悩んでいると、あの言葉がずっと遠くの方から聞こえてくる。

「山をおりたら、帰つてこられなくなるよ」

だれからともなく、昔から繰り返しかえし聞かされていた言葉だ。

今まで一度だつて山をおりたいなんて思ったことはなかったから、全然考えたことがなかったけど、「山をおりたら、帰つてこられなくなる」って、どういうことなんだろう。

じつと考えていると、また聞こえてくる。

「山をおりたら、帰つてこられなくなるよ」

さっきまでゆれていた草木がだまりこんで、こちらを心配そうに見ている気がした。

ぼくは、口を開けて、音を出して息を吸いこみ、はきだした。

悩んでいたけれど、きのうの夜からどうするかは決まっていた。

ぱつと立ちあがつて、勢いよく屋根から飛びおけると、おどろいた草木が、わつとざわめいた。

山をおりて、あの子に会うんだ。

ぼくが下山道めがけて強くかけだすと、鳥も花も空も、山中の自然が、またザツとざわめいて、決心したぼくを見送ってくれているような感じがした。

ぼくは、大声でさげんだ。

「山をおりて、あの子に会いに行くんだ」

ロッジの周りには色取りどりの花が咲いていて、どこかのいたずらな女の子が、摘んだままそこに置いていった、一輪の白いアヤメの花を、横切る間にさつと手に取った。

この花をわたせば、きつと喜んでくれる。

心がうきうきして、かける力はさらに強くなる。

くだり坂が始まるすこし手前で、そのままの勢いでぎつと飛びはねると、ぼくは空まで飛びあがった。

豆粒みただったちっぽけな町が、今度はもう見えないくらい小さくなってしまった。

空中にいたぼくは、一瞬とまって山にお別れを言い、そこから町をめがけて、山の斜面すれすれに急降下しはじめた。

鳥を追いこし、木々を揺らし、さっきまで片手でつかめそうだった町が、またたく間に目前に広がっていく。

まもなく、近づいてくる町のなかに見覚えのある女の子を見つけた。

さっきまで景色はうつろに見えるだけだったのに、今でははつきりと目が冴え、確かにその子をとらえることができた。

ぼくは空中で一気に減速して、その子の方にゆっくりと飛んでいく。

すると、突然の風に、女の子がかぶっていたぼうしが、かわいいうりポンの飾りをゆらしてふわりと飛ばされてしまった。

はっと思っただすぐ直後に、そのぼうしを、となりにいた男の子が跳びはねてしっかりとキャッチした。

男の子はうつむきながら女の子にぼうしを手わたした。  
「ありがとう」

女の子も、少しうつむいて、はにかんだ笑顔でぼうしを受けとった。

ふたりのほおは、真昼の夕日に照らされて、赤く色づいていた。  
そうか、そうなんだ。

あの子には、あの男の子がいま一番の友達なんだ。ぼくが出ていたら、きつと迷惑なんだ。

ぼくは、すごく悲しくなった。

遠い空から、プレゼントの花をそつと落とすと、もうだれも追

つけないくらいの速さで、遠くへ遠くへと飛んでいった。

小さな波音を立てつづける静かな海からは、ほどなく訪れる夜の気配が漂ってくる。

だいたいにもまった水平線を海岸から見ながら、ぼくは考えごとをしていた。

もう、山には帰れないんだ。

それに、あの子にも、もう会えないなんて。

これから、どうしたらいいんだろう。

海に浮かぶ船は黒い点のようで、風切りのはたはたと振れる姿だけがかすかに見てとれる。

山から吹きおろる風は、いつも町をとおって、それから海にそよいでいた。

ゆっくりと海の上を眺めていると、ぼくは一隻のヨットを見つけた。

見つけた小さな影は、ぼくの視界のはしに入ったり消えたりするのみで、はじめぼくは気にもとめていなかった。

ただ、ぼんやりとそのままだった。

と、不意に、ヨットの上が反影に照らされ、その途端、見えた人影にぼくは目をうばわれた。

ヨットに乗っているのは、まぎれもなく、日焼け顔のあの子だった。

ぼうしには、かわいいリボンとっしょに、白いアヤメの花が飾られている。

あのプレゼント、受け取ってくれたんだ。

ぼくはうれしくなって、女の子の乗るヨットまで飛んでいった。

「そっか、きみはヨットが好きなんだ」

ぼくは、女の子の笑顔とっしょに、ヨットの帆を力いっぱいあつと押しした。

そっだよ。もう帰れなくってもいい。

だってぼくは、自由な風だもの。

二度と山のとっぺんには帰れないけど、この子だけの風になって、毎日、ヨットの帆を押すんだ。

この子の笑顔を、これから何度も何度も、見ていきたいから。

ぐっと力をこめて帆を押すと、女の子の長い髪は、やさしい風にまたふわりとなびいた。

(了)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9471s/>

---

風の降る海で

2011年5月3日00時55分発行